

明火而灸。若倉卒遇難、則炭火及金石相擊取火用之亦可也。○中略 其連紙艾炷、截口粘鹽水糊以灸穴、此稱藥灸。俗謂一炷當尋常之十炷。又有艾中撲合雄黃黃丹等藥物、而作連紙切灸、復稱藥灸。言一炷當數十炷、病根作膿血惡水而流去、令人永無病也。斯二灸俱灸痕紅腫成膿、而日久不瘥、壞潰作灸瘡、難痊、最是非定法。明堂經曰：下火點灸欲令艾炷根下赤、燁廣三分、若不三分、孔穴不中、不合得經絡、火氣不遠達。李挺曰：惟頭面四肢差小耳、小兒則小麥雀屎大可也。然則藥灸不可漫用、若遇急症不拘大小、惟以回生起死爲要、或若癰疽瘻瘍痔瘻等病、用藥灸亦宜、又用薑蒜未醬類敷患處而灸其上亦有、又紙上敷未醬薑蒜類而灸其上、以引紙燠患處、俱是熨法、宜用大艾炷者也。近年一醫用合藥灸如蒲穗燒頭隔衣服而熨患處、衣服不燒能徹肌膚、此亦奇法也。○中略

附錄 志牟灸燒金志牟灸、或作針灸、八九十年以前世有之者、近代棄而不用之、其法用銅鐵如筋箸、或如碁子、而炭火燒過令通亦別用厚紙數重、數患處及經穴、隔紙輕々點之、雖其勢猛不似灸之久而救急之功最速、惟恐狀異勢烈、而人皆厭之不用乎、今瘡家用銅鐵如小針箭簇、炭火燒過令通赤、點瘡中取腐肉、此稱燒金、又瀆熱湯令熱乘熱當患處、此稱奴留金、治眼目牙齒、醫亦用之。

〔病家須知五〕痢病のこゝろえを説○中略

又痢病は尤灸に宜臍の兩旁、臍の上下、および背脊、腰髎、何も灸してよし、又腹部の痛甚きところを、阿是灸にするもよし、臍中に鹽を填て灸するもよし、それは塙の底に錢大許の穴を穿て、裏面より紙を貼、穴に鹽を填、底を火に温て後、臍の上に安、艾肉にて灸するなり、巴豆皮大、吳茱萸ヨシユ小を細末して、鹽に和て、灸するもよし、此藥を味醬にて調和扁平にして、そのうへより灸するもよし、巴豆皮を去て、丁子、良薑、麝香などを加たるもよし。

〔贊育醫談二〕漆灸摘要序

夫レ漆灸ハ、漆ヲ灸穴ニ點ジテ、以テ易艾灼、故ニ漆灸ト稱ス、實ニ小兒諸疾ヲ療スル良法ナリ、此ハ甲斐德本翁ノ異人ニ授ル所ノ法ナリ、幸ニ予先人之ヲ家ニ傳ルコト久シ、湖東僧不動院翁ノ、